

壁面が動くときのナビエ・ストークス 方程式について

東大 理 藤 田 宏

§1 序

ナビエ・ストークス方程式の *noncylindrical* な (t, x) -領域における初期値問題は, 動く壁面によって囲まれる容器内 (のさらに動く物体が存在している場合) の非圧縮流体の非定常流と定める問題に対応する. 本講演の目的は, この問題の Hopf-class の弱解が存在することとをいわゆる処罰法 (*penalty method*) によって示すことである. 証明の技術的な部分の詳細は割愛せざるを得ないが, それに肉心のある方には N. Sauer 氏と筆者との共著の論文 (Fujita-Sauer [3], [4]) を見て戴く. (もっとも [3] も要約のみである.)

上の弱解は2次元流の場合には一意となる.

§2 問題の記述 など.

時刻 t ($0 \leq t \leq T$) において流体が占める空間 (平面) 領域を $\Omega(t)$ で表わす. ただし, $\Omega(t) \subset \mathbb{R}^m$ ($m=2$ または $m=3$) であり, $\Omega(t)$ は有界, $\Omega(t)$ の境界 $\Gamma(t)$ は滑らかであると仮定する. なお, T は正の定数であり, 我々は $t=0$ から $t=T$ までの流れに関心を持つ. $\Gamma(t)$ は時間的変化についても滑らかに変化するものとする. $\Gamma(t)$ が一変に帰着になり, $\Gamma(t)$ の成分が接触したりする病理的な場合は考えない.^{注1}

(t, x) -空間内に $\Omega(t)$ が生成する領域を $\hat{\Omega}$, $\Gamma(t)$ が生成する (超)曲面を $\hat{\Gamma}$ で表わす. すなわち,

$$(2.1) \quad \begin{cases} \hat{\Omega} = \bigcup_{t \in [0, T]} t \times \Omega(t) \subset \mathbb{R}^{m+1}, \\ \hat{\Gamma} = \bigcup_{t \in [0, T]} t \times \Gamma(t) \subset \mathbb{R}^{m+1}. \end{cases}$$

物理定数と然るべく取り, 外力を f , $\hat{\Gamma}$ 上の流速の境界値を β , $t=0$ にあける流速の初期値を a で表わせば, 流速 $u = u(t, x)$, 圧力 $p = p(t, x)$ ($(t, x) \in \hat{\Omega}$) を支配する方程式は古典的な形では次のように書かれる:

$$(2.2) \quad u_t = \Delta u - \nabla p - (u \cdot \nabla) u + f(t, x),$$

$$(2.3) \quad \operatorname{div} u = 0.$$

$$(2.4) \quad u|_{\Gamma} = \beta(t, x),$$

$$(2.5) \quad u|_{t=0} = a(x).$$

(2.2) ~ (2.5) からなる初期値問題を (Pr. NC) で表わし,
 $\Omega(t) \equiv \text{一定}$ なる特別な場合は (Pr. C) で特記する.

一応上のように書いたものの本講演では, 弱解の存在証明には本質的関係がないので記述の冗長さを省いて, 次の (些か非物理的存) 簡略化の仮定を設ける:

$$(2.6) \quad f \equiv 0, \quad \beta \equiv 0.$$

この意味で今後 (Pr. NC) のかわりに (Pr. NC)₀ と書く.

我々の目的は (Pr. NC)₀ の Hopf-class の弱解の証明であるが, $u = u(t, x)$ が (Pr. NC)₀ の古典解ならば, (Pr. C) の場合と同様に, 次のエネルギー等式が成立することと注意しておく.

$$(2.7) \quad \|u(t)\|_{L_2(\Omega(t))}^2 + 2 \int_0^t \|u(s)\|_{L_2(\Omega(s))}^2 ds = \|a\|_{L_2(\Omega_0)}^2$$

ここで $u(t)$ は $u(t, \cdot)$ の意味である. 今後は $L_2(\Omega)$ のノルムを単に $\|\cdot\|_{\Omega}$ と書く. さらに, 前後関係から Ω が明らかであるとすれば添字 Ω もはぶく. なお, 本講演では数, 関数いづれも実なるものとする.

注1. Hopf-class の解の non-uniqueness を論じた O.A.

Ladyzhenskaya の最近の注目するべき論文 [6] においては $\bar{\Omega}(0)$ に一矢に帰着している.

§3 弱解の定義と弱解に関する定理

本節では (Pr.C) における E. Hopf の扱い [5] に従って, (Pr.NC)₀ の弱解の定義とする.

まず, 記号の導入から始める. Ω を R^m の任意の有界領域といたす

$$D_0(\Omega) = \{ \varphi \in C^\infty(\Omega) \mid \text{supp } \varphi \subset \Omega, \text{ div } \varphi = 0 \},$$

$$H_0(\Omega) = \text{"} D_0(\Omega) \text{ の } L_2(\Omega) \text{ での完備化" },$$

$$H_0^1(\Omega) = \text{"} D_0(\Omega) \text{ の } W_2^1(\Omega) (= H^1(\Omega)) \text{ での完備化" },$$

とおく. なお, (Pr.NC)₀ においては $a \in H_0(\Omega(0))$ と仮定する.

(t, x) -領域で定義されたベクトル関数に関しては次のものを採用する. $\hat{\Omega}$ は (2.1) におけるものである.

$$\hat{D}_0(\hat{\Omega}) = \{ \varphi \in C^\infty(\hat{\Omega}) \mid \text{supp } \varphi \subset \hat{\Omega}, \text{ div } \varphi = 0 \},$$

$$\hat{H}_0^1(\hat{\Omega}) = \text{"} \hat{D}_0(\hat{\Omega}) \text{ の } \nu(\cdot)\text{-norm での完備化" },$$

ただし,

$$(3.1) \quad \nu(\varphi)^2 = \int_0^T \|\nabla \varphi\|_{\Omega(t)}^2 dt \quad (\varphi \in \hat{D}_0(\hat{\Omega})).$$

注意するべきことは $\hat{\Omega}$ が $t=0$, $t=T$ では閉じているので $\varphi \in \hat{D}_0(\hat{\Omega})$ であつても $\varphi|_{t=0}$, $\varphi|_{t=T}$ は必ずしも 0 とならないことである。もちろん, $\varphi|_{\hat{\Gamma}} = 0$. また $u \in \hat{D}_0(\hat{\Omega})$ に対して, trace の意味で $u|_{\hat{\Gamma}}$ は意味を持ち $u|_{\hat{\Gamma}} = 0$ となる.

弱い方程式における試験関数は次の class からえらばれる:

$$(3.2) \quad \hat{\mathcal{D}}(\hat{\Omega}) = \{ \varphi \in \hat{D}_0(\hat{\Omega}) \mid \varphi|_{t=T} = 0 \}.$$

一方, 弱解は次の class に属するものとされる.

$$(3.3) \quad \mathcal{U}(\hat{\Omega}) = \{ u \in \hat{H}_0^1(\hat{\Omega}) \mid \text{ess. sup}_{0 \leq t \leq T} \|u(t, \cdot)\|_{\Omega(t)} < +\infty \}.$$

(定義) u が $(Pr. NC)_0$ の弱解であるとは次の (i), (ii) が成立することである.

$$(i) \quad u \in \mathcal{U}(\hat{\Omega}),$$

$$(ii) \quad \forall \varphi \in \hat{\mathcal{D}}(\hat{\Omega}) \text{ に対して}$$

$$(3.4) \quad F(u, \varphi) \equiv \int_0^T \{ (u, \varphi_t) + (u, \Delta \varphi) + (u, (u \nabla) \varphi) \} dt \\ = -(a, \varphi(0)).$$

さて, 我々の結果は次の定理である.

(定理 1) (Fujita-Sauer [3], [4]) 任意の $a \in H_0(\Omega(0))$ に対して $(Pr. NC)_0$ の弱解が存在する.

(定理2) (Fujita [2]) $m=2$ ならば $(Pr.NC)_0$ の弱解は一意である.

§4. Penalty method による近似

弱解の存在定理である定理1の証明には一種の penalty method を適用する.

まず, $\Omega(t) \subset B$ ($0 \leq t \leq T$) なる R^m の有界領域 B を固定し

$$(4.1) \quad \begin{cases} \hat{B} = [0, T] \times B \\ \hat{E} = \hat{B} - \hat{\Omega} \\ \chi = \text{"}\hat{E} \text{ の特性関数"} \end{cases}$$

と置く. すると, a を $\Omega(0)$ の外では0と置いて B 内に拡張し, それを $\bar{a}$ で表わす.

n を自然数として, $(Pr.NC)_0$ におけるナビエ・ストークス方程式の右辺に penalizing term $-n\chi \cdot u$ を加える. このとき得られる初期値問題と $(Pr.AP)_n$ で表わそう. すなわち, $(Pr.AP)_n$ は古典形では次のように書かれる.

$$(4.2) \quad \begin{cases} u_t^n = \Delta u^n - \nabla p^n - (u^n \cdot \nabla) u^n - n\chi(x) u^n, \\ \operatorname{div} u^n = 0, \\ u^n|_{\partial B} = 0, \quad u^n|_{t=0} = \bar{a}. \end{cases}$$

(4.2)の解 u^n が存在し, $\{u^n\}$ あるいはその部分列が $n \rightarrow \infty$ に際して何等かの意味で収束するならば, その極限 u^* を $\hat{\Omega}$ に制限したものが $(Pr. NC)_0$ の解であることと期待するのは不自然なことではない. 何故なら, — u^n が滑らかであるとして形式的に計算すると — (2.7) と同様に次のエネルギー不等式が成立するからである.

$$(4.3) \quad \|u^n(T)\|_B^2 + 2 \int_0^T \|\nabla u^n\|_B^2 dt + 2n \iint_{\hat{E}} |u^n|^2 dx dt \\ = \|\bar{a}\|_B^2 = \|a\|_{L^2(\partial\Omega)}^2$$

実際, (4.3) から直ちに判ることは $n \rightarrow \infty$ のとき u^n は (それを $\hat{E}$ に制限したものは) $L_2(\hat{E})$ において 0 に収束することである. したがって, u^n の極限 u^* が $\hat{\Gamma}$ への trace をもつならば $u^*|_{\hat{\Gamma}} = 0$ となり望む境界条件が満足されることになる. 一方, $\hat{\Omega}$ の内部においては $\chi \equiv 0$ であるので, u^n は $(Pr. NC)_0$ におけるものと全く同じ方程式を満足している. したがって, 極限 u^* も同じ方程式を満足することになるであろう. すなわち, $u^*|_{\hat{\Omega}}$ が $(Pr. NC)_0$ の解となることを期待される.

実際には (少なくとも $m=3$ の場合には) ~~(Pr. AP)~~ $(Pr. AP)_n$ の滑らかな解が存在することか保証されないので, §3 に準じて $(Pr. AP)_n$ の弱解を定義し, u^n はその意味に解釈される

ばならない。このような u^n の存在は (Pr.C) の場合と全く同様に Galerkin 法によつて証明される。また、弱解 u は (4.3) の $=$ と $\leq$ で置きかえたエネルギー不等式を満足するので上記の見通しに従つて議論をすすめることが可能である。エネルギー不等式から得られる次の評価を書いておこう。

$$(4.4) \quad \|u^n(t, \cdot)\|_B \leq \|a\| \quad (0 \leq t \leq T),$$

$$(4.5) \quad \int_0^T \|\nabla u^n(t)\|_B^2 dt \leq \|a\|^2/2,$$

$$(4.6) \quad \|u^n\|_{L_2(\hat{E})}^2 = \iint_{\hat{E}} |u^n|^2 dx dt \leq \|a\|^2/2n.$$

§5 証明のいくつかの部分

(4.4) - (4.6) の評価から $\{u^n\}$ の適当な部分列 $\{v^n\}$ がある $v^* \in \hat{H}_0^1(\hat{B})$ に $L_2(\hat{B})$, $\hat{H}_0^1(\hat{B})$ における弱収束の意味で収束することと判る。また, $v^*|_{\hat{E}} = 0$ であり, 従つて $v^*|_{\hat{P}} = 0$ なることと判る。これより標準的な議論によつて $v^*|_{\hat{\Omega}} \in \hat{H}_0^1(\hat{\Omega})$ となることと導かれる。

$u = v^*|_{\hat{\Omega}}$ とおいて, これが (Pr.NC)₀ の解であることと示そうとすれば問題は u が (3.4) を満足するかといふことになる。 $\varphi \in \mathcal{D}(\hat{\Omega})$ とおれば弱解 u^n は

$$(5.1) \quad F(u^n, \varphi) = -(a, \varphi(0))$$

を満足する. ここで, F は (3.4) におけるものである.

(5.1) における極限移行を検討すると次の事柄が証明の核心であることが判る:

$$(5.2) \quad \{u^n|_{\hat{\Omega}}\} \text{ は } L_2(\hat{\Omega}) \text{ においてコンパクト.}$$

事情は (Pr.C) の場合に平行であるが, より微細な議論が必要となる. たとえば (Pr.C) の場合にそのより便な Aubin [] の compactness theorem を下の補題の形に modify しなければならないし, さらに, その補題の適用で事があわるわけではない. (詳しくは [] 参照) 実際, Aubin 型定理である補題から判ることとは次の事柄である.

(命題 5.1) 区間 (α, β) ~~を~~ および n 領域 $\Omega \subset \mathbb{R}^m$ を

$(\alpha, \beta) \times \Omega \subset \hat{\Omega}$ なる $\hat{\Omega}$ にとれば

$$(5.3) \quad w_n(t) = P(\Omega)(u^n(t, \cdot)|_{\Omega}) \quad (n=1, 2, \dots)$$

によって定義される $w_n: (\alpha, \beta) \rightarrow H_0(\Omega)$ は $L_2(\alpha, \beta; H_0(\Omega))$ においてコンパクト集合をなす. ところで, $P(\Omega)$ は $L_2(\Omega)$ から $H_0(\Omega)$ への正射影である.

この命題の証明に用いられる補題は次のものである.

(補題) (Fujita-Sauer, []) M_i ($i=0, 1, 2$) をヒルベルト空間とし, 作用素 $P: M_0 \rightarrow M_1$ および $S: M_0 \rightarrow M_2$

はいずれも線形コンパクトであるとする. また,

$$(5.4) \quad Sv = 0 \implies Pv = 0 \quad (v \in M_0)$$

が成立することと仮定する。さらに $X_i = L_2((\alpha, \beta); M_i)$

($i=0, 1, 2$) とおいて, $\hat{P}: X_0 \rightarrow X_1$, $\hat{S}: X_0 \rightarrow X_2$ と

$$(\hat{P}v)(t) = Pv(t), \quad (\hat{S}v)(t) = Sv(t)$$

によって定義する。このとき $v_n \in X_0$ の列 $\{v_n\}$ に関し

(i) $\{v_n\}$ は X_0 で有界,

(ii) $\{\frac{1}{\alpha} \hat{S}v_n\}$ は X_2 で有界,

ならば $\{\hat{P}v_n\}$ は X_1 でコンパクトである。

さて, 補題を使用する際の(命題5.1の証明のために)記号の対応は次の通りである。

$$M_0 = \{u \in W_2^1(\Omega) \mid \operatorname{div} u = 0\},$$

$$M_1 = H_\sigma(\Omega)$$

$$M_2 = \mathcal{D}(A)' = \mathcal{D}(A) \text{ の dual space.}$$

ただし, A は Ω におけるストークスの作用素, すなわち

$$\mathcal{D}(A) = W_2^2(\Omega) \cap H_\sigma^1(\Omega), \quad A\varphi = -P\Delta\varphi \quad (\varphi \in \mathcal{D}(A))$$

によって定義される H_σ 内の自己共役作用素である。 $\mathcal{D}(A)$ を

ヒルベルト空間とみなすときは $\|A\varphi\|_{H_\sigma(\Omega)}$ を $\varphi \in \mathcal{D}(A)$ のノルムとして用いるものとする。

P, S は次のようにとる:

$$(5.5) \quad P = P(\Omega) \text{ (} W_2^1(\Omega) \text{ の } L_2(\Omega) \text{ への injection)}$$

$$(5.6) \quad Su(\varphi) = \langle Su, \varphi \rangle = (u, \varphi)_{L_2(\Omega)}, \quad (u \in M_0, \varphi \in \mathcal{D}(A))$$

肝心の v_n といては

$$(5.7) \quad v_n(t) = u^n(t, \cdot)|_{\Omega} \in W_2^1(\Omega) \quad (\text{a.e. } t)$$

をとる. この v_n に対して補題の仮定の有界性が満足されていることは, (i) については (4.5) から直接判るが, (ii) については, 不等式

$$\begin{aligned} |(w \nabla) \varphi, w| &\leq C \|\nabla \varphi\|_{L_3(\Omega)} \|w\|_{L_2(\Omega)} \|w\|_{L_6(\Omega)} \\ &\leq C \|A \varphi\| \cdot \|w\|_{L_2(B)} \cdot \|\nabla w\|_{L_2(B)} \end{aligned}$$

が, 与えられた $w \in H_{\sigma}^1(B)$, $\varphi \in \mathcal{D}(A)$ に対して成立すること, (4.4) と から得られる評価

$$(5.8) \quad \left\| \frac{d}{dt} \hat{S} v_n(t) \right\|_{M_2} \leq C \|\nabla u^n(t, \cdot)\|_B \quad (\text{a.e. } t)$$

により (4.5) を考慮すると 1 に近づいて判る.

引用文献

- [1] Aubin, J. P., Un théorème de compacité,
C.R. Acad. Sci. Paris 256 (1963), 5042-5044.
- [2] Fujita, H., Remarks on the 2-dimensional non-stationary solutions of the Navier-Stokes equation in non-cylindrical domains, (in preparation).
- [3] Fujita, H. and N. Sauer, Construction of weak

solutions of the Navier-Stokes equation in a noncylindrical domain, Bull. Amer. Math. Soc. 75 (1969), 465-468

[4] ———, On existence of weak solutions of the Navier-Stokes equations in regions with moving boundaries, J. Fac. Sci. Univ. Tokyo, 吉田記念号 (1970).

[5] Hopf, E. Über die Anfangswertaufgabe für die hydrodynamischen Grundgleichungen, Math. Nachr. 4 (1951), 213-231.

[6] ~~O.A.~~ Ladyženskaja, O. A., Example of nonuniqueness in the Hopf class of weak solutions for the Navier-Stokes equations, Izv. Akad. Nauk SSSR, Ser. Mat. Tom 33 (1969) No. 1. (English Translation) Math. USSR-Izvestija, Vol. 3 (1969), No. 1.